

『北越従軍銃創図録』について

山内 一信

東員病院

名古屋大学附属図書館医学部分館には『北越従軍銃創図録』が保管されている。この図録には戊辰戦争中の英国公使医員ウィリス（William Willis, 1837～1894）が銃創に対してクロロホルム麻酔を使って処置を行った診療記録が残っている。今までにこの図録は近藤達平による論文をはじめ、いくつかの文献で引用されることはあっても図録中の手術記録そのものについて詳細に報告されたことはなかったので紹介する。

図録は23丁（縦13cm, 横17cm）からなる手稿本で、時期は明治元年戊辰戦争中の北越における銃創治療の記録である。記載者は赤川玄樸とされ、官軍側（倒幕軍）と思われる負傷兵、36症例が記載されている。扉に続く最初のページでは以下のような内容（意識）が記述されている。「北越戦争、すなわち賊軍との戦いで、負傷者が多いことを憂いておられる中、西洋医学は素晴らしいものであるので、柏崎病院に治療すべき負傷者を收容し、その治療を行った。その経緯を示すものである。明治元戊辰八月」。次ページの序文には以下のような内容（意識）が記載されている。「本邦は刀槍弓馬の武芸を第一にする国であり、250年の間、創の手当てをすることはなく、銃創について西洋の本を読んでもよくわからない。実際この北越戦争に従軍してみると銃創患者が多い。その治療においてウィリスの治療は切断術を用いるなどして素晴らしいものがある。その患者、数十名について抄録を記し、弟子達のために役立てたいと思う。」

順番は診療月日順ではなく、おおよそ身分の高いものから記載され、記載項目は①所属、②氏名、③手術日、④受創場所、⑤治療状況である。このうち術者の記載のある者は、宇氏3例とウリース1例、赤川1例であった。治療日は7月1日から10月4日、コロールホルム記載例は1例、所属は大総督宮様6名、新発田藩15名、長州1名、薩州1名、来伝村1名、本邦1名、記載なし1名であった。受創場所は関川6名、小松村1、見附5、田井1、大口1、五十嵐川1、長呂1、加茂山1、矢彦森2、會津口1、赤坂会津口1、赤谷口2、鼠ヶ関4、山内2、小川通1、庄内1、赤岩2、當村1、吹谷1であった。切断者は3名、いずれも宇氏が術者であった。他の記録は丸を取出したもの5名、骨傷4名、自然治癒しかかっているもの4名、その他（記載なしも含む）などであった。

ここで特記すべきことはコロールホルムの記載である。記載内容は「10月4日切断、手術宇氏、脈管八条、針数9本、コロールホウム、度従60滴、至200滴」である。

本図録の意義は本邦においてクロロホルム麻酔使用例の最も古い記録の一つで、クロロホルムの滴数の記載があることであろう。本図録とよく似た形の記録がある。弘田親厚による『慶應4戊辰 会津征討日記』である（壬生城内土佐藩野戦病院とクロロホルム麻酔の使用。『壬生の医療文化史』より）。慶應4年潤4月14日の記録中に「吉川泰輔銃創、上肢骨損傷につきコロール（クロロホルム）を嗅がせ、麻酔せしめ上肢を切断し」とある。これらのことから戊辰戦争ではクロロホルム麻酔を使用して切断手術をしていたことがうかがえる。

このウィリスと名古屋の生んだ博物学者伊藤圭介との接点を示す記録が、『伊藤圭介日記第4集錦窠翁日記』に記されている。慶應4年2月8日に「……又夕方前御用人、薩鄧病院ニ此頃来ル英医ノ治療ヲ可觀ノコトアリ……」と記述され、伊藤圭介はウィリスと実際に会っていたようである。尾張藩主徳川義宜が京都の警護の役目を仰せつかっているとき、随行医師として出張した伊藤圭介の出来事のひとつであるが、それ以上の記述はない。